厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）
（分担）研究報告書

ブロック拠点病院のない自治体における中核拠点病院の機能評価と体制整備のための研究

課題番号：H30－エイズ－一般－003

【分担研究１】拠点病院を中心とした教育講演、意見交換、研修教材の作製

研究分担者：高田　清式（愛媛大学医学部附属病院　教授）

研究要旨：四国のようにブロック拠点病院が近辺になく、県内の個々のエイズ拠点病院が十分に機能していない、いわゆる地方の比較的医療過疎である地区に、機能評価と体制整備に関する本研究によってHIV診療の充実や均てん化が促されていくことが期待されている。令和2年度の研究成果として、本研究では拠点病院を中心としたネットワーク会議、意見交換、研修教材の作製を行った。地方でのHIV診療のモデルとして体制整備・充実に努めつつありさらに四国全体に広げていくことを計画し実行しつつある。

研究分担者
武内世生・高知大学医学部・准教授
末盛浩一郎・愛媛大学医学系研究科・特任講師
井門敬子・愛媛大学医学部附属病院・副薬剤部長
中村美保・高知大学医学部附属病院・看護師

A.研究目的

ブロック拠点病院が近辺にない愛媛県において当院は、エイズ地域中核拠点病院に指定され、累計200名以上の患者を治療している。四国地区は近年HIV・エイズ患者の増加が著しく、当県もエイズ拠点病院に指定されている病院が17施設もあるものの殆どが診療未経験であり、大半の患者が当院に受診している。かつ四国地区は、高齢化率が29%前後の地方であり、都市に比べ高齢者のHIV・エイズ患者が多く、HIV感染および合併症が進行し日常生活に差し障りが著しく自宅以外での長期療養が必要な例も少なくない。当院は急性期病院の立場であり、自宅で生活困難な長期療養患者の対応については、他の施設への紹介・受け入れを個々の事例において行っているがHIVに対する不安や感染リスクが問題になり、受け入れに難渋しているのが実情である。さらに治療以外にも家族対応および就業面など社会的な対応も迫られることも多い。これらの実情のもと、数多くの医療スタッフによるチーム医療が必要な領域であることを踏まえ、当院では数年前よりHIV診療チームを立ち上げ活動しつつある。こうして愛媛県各地域の各病院・施設と連携を行うように努めているものの、対応すべきHIV感染症患者は多くかつ経済・人材面も満たされておらず、連携しうる病院・施設への啓蒙や人材の育成も患者数の増加からは極めて不十分な状況である。このような背景のもと、中核拠点病院の立場から、県内の病院・施設との連携整備、さらには

県・市の保健行政との連携も踏まえ、HIV感染者・エイズ患者に対する診療体制を整備し充実を図りたいと考えている。また、高齢化と患者数の増加にて同様の背景である高知県の拠点病院も研究対象として活動していく計画である。さらには、昨年度より徳島県、香川県にも研究への参加を促し、ブロック拠点病院が存在しない四国地区全体の HIV/エイズ診療体制の充実に努めることを継続し実行していきたい。

さらにこれらの研究成果は、エイズ学会をはじめ多くの機会で公表・報告していくことで、他府県などにモデル地区としての立場で発信し、四国のみならず全国の地域の HIV 診療の充実に努めたい。

B．研究方法

拠点病院を中心とした教育講演、意見交換、研修教材の作製

愛媛県および高知県の各拠点病院の HIV に関する啓蒙、意見交換を図るために、県単位での講演会・勉強会および県の行政の協力を得て HIV 診療ネットワーク会議（各県全域の拠点病院が参加）や各病院にて講演会を開催し、かつ情報収集のため意見交換を行う。また、研修教材の作成に着手する。さらに、徳島県、香川県とも連携し、四国全体の HIV 診療体制の充実を図る。

（倫理面への配慮）

患者および関係者に対する人権の保護に配慮して行い、調査に協力できない場合も不利益にならないようにする。

C．研究結果

愛媛県の各拠点病院の HIV に関する啓蒙、意見交換を図るために、県の行政の協力を得て HIV 診療ネットワーク会議（各県全域の拠点病院が参加し討論）を令和 2 年 2 月 18 日に開催した（四国の連携のため高知県の医療スタッフも参加した）。研修教材の作製に着手した。また、今年度は四国の各県の拠点病院の看護師・ソーシャルワーカーを中心に、看護・介護に関する合同会議を行った。令和 3 年は 2 月 17 日に WEB 会議を行い、県の行政（衛生研究所）から現在の HIV 感染者の現況報告、各拠点病院のアンケート集計と討議、当大学病院の HIV 診療の現況、新たな HIV-1/HIV-2 抗体確認検査法（GeeniusTMHIV1/2 キット）の紹介などを行った（図 1 に一部提示）。

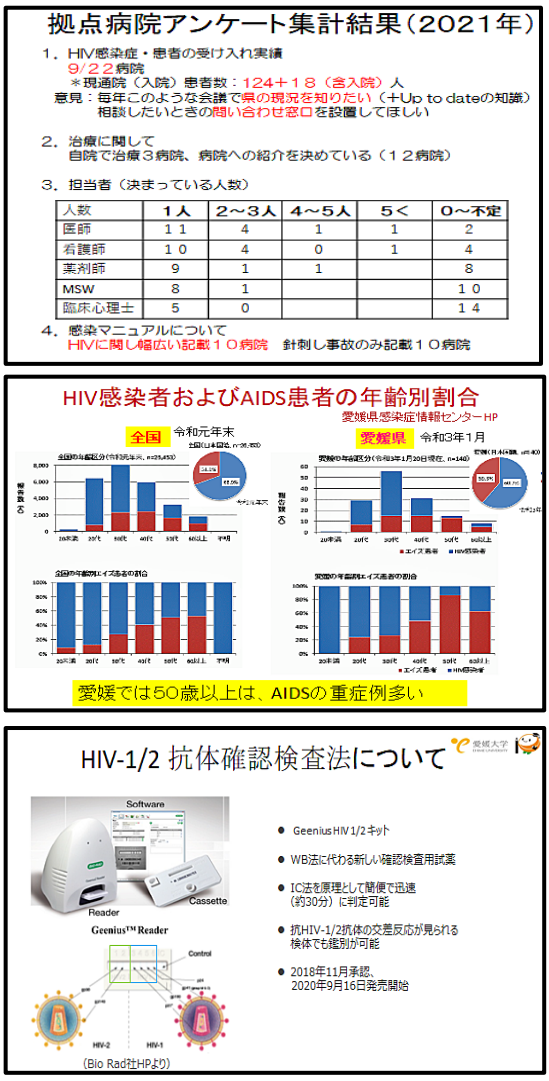

図１　ネットワーク会議の資料（抜粋）

さらに高知県においては、「高知県エイズ拠点病院会議」「感染防止対策合同カンファレンス」「高知県HIV感染症研修会」「歯科医療ネットワーク連絡協議会」「1日実地研修」「出前研修」を計画していたが、新型コロナウイルス感染症蔓延のため集合型研修ができなくなり、作製した冊子「在宅介護に役立つ薬の情報～抗HIV薬の基礎知識～」を配布し、拠点病院からの意見を求めた。

また、四国内の拠点病院の意見交換目的で、令和2年10月17日に四国地区エイズ診療中核拠点病院HIV担当看護師連絡会をWEB会議にて行い4県9名の看護師が参加し、各病院の実情や行政との連携に関して討議を行った。さらに、同日午後に四国地区エイズ診療中核拠点病院HIV診療医師研修会を開催し四国各地区から計5例（妊娠合併例、抗酸菌症例など）を提示し、コメンテーターとして照屋勝治先生（国立国際医療研究センター）にも参加していただき、四国の医師8名と看護師、薬剤師、MSWも参加のもと合同で各症例の討議を行った。

介護をするうえで必要になる抗HIV薬などの薬の紹介と内服法の冊子「在宅介護に役立つ薬の情報～抗HIV薬の基礎知識～」を作製し、県内の各介護施設および全国の中核拠点病院にも配布した（アンケートも同封し、回収して意見を組み入れ、次回作製のための参考にする）。

D．考察

地方における病院・介護施設間のHIV診療連携として愛媛県と高知県をモデルに、地方におけるHIV診療および介護連携に関する啓蒙とともに実態調査を行った。全国的に少子高齢化社会になりつつあり、高齢化が一歩進んでいる愛媛県および四国は、今後のHIV感染者の高齢化と介護・福祉対策を考える上で代表的なモデル地区と考える。

四国地区にはブロック拠点病院はないものの、当院では令和2年末現在累計200名以上のHIV診療経験があり（県内の大半のHIV診療を担当）、愛媛県での中核拠点病院の立場にある。また、四国の他県からも患者は通院している現況である。HIV感染者・エイズ患者が全国的に増加する傾向にあるが、四国も例外ではなく、愛媛県においても新たに毎年10名以上の新規感染者・患者が報告されており、また他府県から年配の帰郷者も少なからずあり、そのため高齢のHIV感染者が多く見られHIV診療の充実は早急に迫りつつある課題であると考えられる。今年度も南予の山間部（鬼北町）に帰郷しかつ当院まで継続通院できない高齢者のHIV感染者を地域連携のもと近くの医療機関に紹介し便宜を図った。さらに愛媛県をはじめとする地方においては、高齢のHIV/エイズ患者が比較的多く、愛媛県において令和2年末現在50歳以上の8割は発見時にエイズ患者であるという現実がある。なお、高齢化の進んだ地方においては、薬剤の改良・開発が年々進んでいるものの、今後HIV感染者の高齢化とともに薬剤の副作用を考慮した内服継続・薬剤の減量なども重要な観点として検討していく必要があると思われ、四国地区に応じた実践的な（事前評価委員からのコメント・助言も参考にし、針刺し事故時の対応方法および配備薬剤も具体的にどの病院に備わ

っているかなど、どの地区においても素早く対応ができるような内容も含めて）抗HIV薬および併用薬に関する資料を改訂・作製した。

いずれにしてもHIV患者の早期発見を目的として、留意点の強調および患者の増加を抑制するためのHIV感染に対する予防啓発とともに、現実の感染者に対して地方の各地域・病院においてHIV診療の向上と福祉の連携体制の充実を図ることは重要な課題であり、今後もさらに指導・教育および現況を把握するための調査研究に努めたいと考える。

また、愛媛県ならびに高知県に加え昨年に引き続き今年度も徳島県、香川県とも福祉連携体制などについて、第一線でHIV診療されている国立国際医療研究センターの照屋勝治先生にも協力していただき十分に討議・連携ができたことは四国地方全体を考える上でも有意義であった。高齢化にあたり、HIV診療および福祉連携のあり方について具体的な今年度の出張研修・訪問の結果等を踏まえ、さらに充実に努め、高齢化率の高い愛媛県のような四国地方においても、早期発見や重症患者の治療が十分に行われるように常々心がけて、充足した生活が１人では送れないHIV感染患者に対し、拠点病院および介護福祉間の連携が円滑にできるように努めていく必要性があると考える。なお、その介護福祉連携のモデル地域として今後も研究・報告を当地区から全国に発信していきたいと考える。

Ｅ．結論

ブロック拠点病院がない地域において、HIV診療体制整備のために愛媛県及び高知県で拠点病院などへの会議・啓蒙を行い、具体的な問題を整理し知識・経験を共有できた。高齢化社会を迎え介護・療養が必要なHIV感染・エイズの増加に対応するために、HIV診療体制の整備は、地方においては特に各病院・施設間の連携の充実が不可欠であり研究を継続し地方のモデルという立場からもさらに向上に努めたい。

Ｆ．健康危険情報

該当なし

Ｇ．研究発表

1．論文発表

1．末盛浩一郎、田中景子、石川明子、小野恵子、芝田佳香、武田玲子、若松綾、宮崎雅美、中尾綾、乗松真大、木村博史、山岡多恵、井門敬子、竹中克斗、高田清式. 愛媛県の各医療機関におけるHIV/AIDS研修会後のアンケート調査を介した比較検討. 日本エイズ学会誌,23(1):26-32,2021,

2. Nakao A, Yamanouchi J, Takenaka K, Takada K. The Iowa Gambling Task on HIV-infected subjects. J Infect Chemother. 26(3):240-244,2020

3．高田清式. 新型コロナウイルス感染症の今わかっていること. EOCA（愛媛臨床整形外科医会会報）:35（1）5-10,2020.

4. Matsushita M, Arise K, Morimoto N, Takeuchi S. End-of-season outbreaks of nosocomial influenza caused by waning vaccine immunity. Journal of Infection Prevention 21: 119-121, 2020

5. Kitamura S, Matsushita M, Komatsu N, Yagi Y, Takeuchi S, Seo H. Impact of repeated yearly vaccination on immune responses to influenza vaccine in an

elderly population. American Journal of Infection Control 48: 1422-1425, 2020
6. Matsushita M, Matsumoto K, Kitamura S, Komatsu N, Seo H, Takeuchi S. Validation of the "My Headache Checker" that includes osmophobia in the diagnosis of migraine. Journal of general and family medicine 22: 24-27, 2020
7. 福井亜里沙、早淵　修、本田真仁、吉田圭佑、片岡秀之、山口普史、高田清式、市原新一郎．早期治療介入により重症化を免れた熱帯熱マラリアの１例．四国医学雑誌.76（3,4）:197-202,2020.
8. 中村美保、前田英武、岡崎雅史、西田拓洋、朝霧正、四國友理、北村優衣、高田清式、武内世生．医療機関におけるHIV陽性者受け入れ時の問題点と解決への取り組み．日本エイズ学会誌（投稿中）

2．学会発表

1. 高田清式．HIV感染症の最近の話題．日本内科学会第64回北海道支部生涯教育講演会、2020年、北海道、WEB開催
2. 菊地正 、蜂谷敦子、西澤雅子、椎野禎一郎、俣野哲朗、佐藤かおり、豊嶋崇徳、伊藤俊広、林田庸総、潟永博之、岡慎一、古賀道子、長島真美、貞升健志 、近藤真規子、 宇野俊介、谷口俊文、猪狩英俊、寒川整、中島秀明、吉野友祐、堀場昌英、茂呂寛、渡邉珠代、今橋真弓、松田昌和、重見麗、岡﨑玲子、岩谷靖雅、横幕能行、渡邉大、小島洋子、森治代、藤井輝久、高田清式、中村麻子、南留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦亙 、吉村和久、国内新規 HIV/AIDS 診断症例における 薬剤耐性HIV-20１の動向．日本エイズ学会、2020年、WEB開催
3. 谷口裕美、岡本愛、村上晶子、森本麻里、川野由季、西村真智子、末盛浩一郎、宮本仁志、高田清式、当院におけるHIVスクリーニング検査偽陽性例の検討．日本エイズ学会、2020年、WEB開催
4. 中尾綾、武田玲子、藤原光子、本園薫、末盛浩一郎、山之内純、竹中克斗、高田清式、HIV感染者へのPOMS2を使用した精神的支援の検討．日本エイズ学会、2020年、WEB開催
5. 臼井麻子、中尾綾、西田拓洋、吉川由香、海面敬、吉武亜紀、赤松祐美、池谷千恵、中村美保、川田通子、佐藤譲、武内世生、窪田良次、尾崎修治、和田秀穂、千酌浩樹、山下光、山之内純、高田清式、中国四国地方におけるHIV関連神経認知障害に関する研究 －中間報告－．日本エイズ学会、2020年、WEB開催
6. 乗松真大、井門敬子、松本卓也、本園薫、末盛浩一郎、飛鷹範明、田中守、高田清式、抗HIV薬ラルテグラビルが原因でGrade 3の血圧上昇をきたした１症例．日本エイズ学会、2020年、WEB開催
7. 高田清式、末盛浩一郎、村上雄一、高齢者のアフリカ旅行後の重症マラリアの治験例、グローバルヘルス合同大会2020, 2020年、WEB開催

H．知的財産権の登録状況（予定を含む）

該当なし